

受け継がれる灯 ～火縄づくりの伝承～

平成28年に立ち上がった上小波田火縄保存会の代表である岩崎さんにお話を伺いました。



上小波田火縄保存会
会長 岩崎 義孝 さん

立ち上がった火縄保存会

昔、上小波田の農家は毎年冬になると火縄づくりをしていました。私の家も代々農業を営んでいて小さい頃は親父と一緒に火縄づくりの手伝いをしていました。男性が竹を削る力仕事を、女性が削り出された縄をなうという役割分担が一般的でした。

冬の寒い時期に納屋で行う火縄づくりはとても根気がいるため、年々生産者は減っていき、私が学生の頃、親父が作るのをやめてしまい、それっきりになってしまいました。

上小波田の火縄生産者が徐々に減っていくことに寂しい思いがありました。が、なかなか自分から作るうという気にはなれませんでした。そして、とうとう生産者が最後の一人になってしまいました。

そんな中、名張地区の秋の催し「街道市の主催者から上小波田の火縄づくりをみんなの前で実演してほしい」という依頼が上小波田地区に届きました。そこで最後の火縄



職人である岩崎一さんけんいちにお願いして、竹の削り方や、縄をなう方法を披露していただきました。

すると、「火縄づくりをぜひ続けてほしい」「伝統を絶やしてはいけない」という声を多くいただきました。この出来事をきっかけに、上小波田火縄保存会を立ち上げました。会員は30代から60代の6人で、最後の職人である岩崎一さんから指導を受けて火縄づくりの技術を学んでいきました。

保存会を立ち上げた最初の年は、削り出した竹の皮の厚さにムラがあり、神社に奉納するような火縄を作れず、依頼された数を納めることができませんでした。今は、技術的にもある程度進歩したので依頼を受けた数を作ることができました。

火縄のことを知ってもらいたい

火縄づくりはホコリがたくさん出ますし、寒い中での作業です。決して楽な作業ではありません。しかし、地域の伝統が無くなってしまうのは非常にもったいないし寂しいことです。この現状をなんとかしたいという私の気持ちに賛同してくれた仲間たちと一緒に保存会として活動できることはうれしい限りです。今後は、市民の皆さんに知っていただく機会を増やしていければいいと思っています。

活動はまだまだ始まったばかり。これからも、地元の伝統を残していくために自分たちにできることをやっていこうと思います。

名張の火縄は京都八坂神社の「をけら詣り」で使われています。



八坂神社提供

大晦日から元旦にかけて、京都の八坂神社で行なわれる無病息災と厄除けの行事として行われる「をけら詣り」で名張の火縄が使われていることはあまり知られていません。

火縄に移した神火をくるくる回しながらお参りし、持ち帰って火種で雑煮を煮たり、燃え残った火縄は火伏のお守りにします。

竹から作られる上小波田の火縄は、全国的に見ても珍しいと、八坂神社でも縁起物として重宝されています。

上小波田の火縄はこうして作られる



- ①なたで竹の表面を薄く削り取っていく。
- ②削ったものを2本ずつ組み合わせ、両手でこするように縄をなう。
- ③1本3m30cmにしたものを陰干し完成